

はじめに

「市民教育は『納豆』をつくる教育である」

市民教育とは何だろうか。

この本を手にしたあなたは、市民教育というものはどんなものだと思っているのだろうか。市民になるための教育だと仮に考えてみると不思議な気持ちになるかもしれない。われわれは、そもそも市民であり教育する必要があるものだろうか。あるいは、私が農業に従事している農民だとして、何か別の市民というものになるということなのだろうか。「市民教育」ということは自体が比較的新しいものであり、このことばを耳にして即座にイメージできる人は少ないだろうと考える。

この本は、そのような人々に市民教育というものの、その考え方を知ってもらうことを意図して書かれたものである。21世紀のわれわれの社会には市民教育は重要であり、必

要なものであると信じているが、それはこの本を読んでくれた方がそれぞれ自分で自分の答えをみつけてくれることであらう。

教育をめぐる議論は、「ゆとり教育論 VS 学力低下論」という様相を呈している。二〇〇二年（平成14年）4月に始まった新しいカリキュラムに基づく学校教育のありようが、議論の火種である。教科内容の大幅な削減、総合的な学習の時間の創設など、大きな変革が断行されている。現在進行形だ。学校週5日制（子どもの週休2日制）も本格実施となった。これらの改革が定着するのは、これからだろう。いまここで、その是非を判断するのは、早急に思える。

ただ、市民教育という考え方がどうして注目され、必要とされるようになったのか、その原因と理由を考えることが、現在議論されている「ゆとり教育 VS 学力低下論」についても考える糸口になるだろう。

今回の教育改革が議論されてきた一九九〇年代後半は、次のような時代だった。

社会的状況

- ・平成不況のなかで、喘いでいた（今も？）
- ・阪神・淡路大震災の打撃があった
- ・IT関連の産業が飛躍的に伸びた

子どもたちをめぐる状況

- ・いわゆる学級崩壊現象が起こった
 - ・「キレル子ども」が話題になった
 - ・依然として不登校は減らず、全国で13万人にものぼっている。
- （これは、10年前の約2倍の数字である。）

このような背景から、21世紀の社会を担う子どもたちには、複雑な社会でも通用するための「生きる力」が必要だということになった。複雑な社会を生きるためには、それなりの能力が身につけていなければならない。知的な能力や体力、感受性などは当然と

して、それ以外にも、たとえば身のこなしや、人とかかわる力というのも大切である。IT社会になればなるほど、人間の人間による他者へのはたらきかけが重要になってくるからだ。

近年、「人間関係作り」に焦点をあてた教育実践が多くなっている。たとえば、集団のなかでの個のあり方を多様なエキササイズで見つめ直す「グループエンカウンター」や、社会的資質を高め、集団のなかでの個の生かし方を体得する「ソーシャルスキルトレーニング」、コミュニケーション能力を基礎にしながら集団のなかで他者の役に立つ活動を盛り込んだ「ピアサポートプログラム」などの実践がそれである。裏を返せば、子どもたちの対人関係能力や社会性がきちんと育成されていない、ということが背景にある。

人と人との直接的なかかわりの希薄化の背景には、機械化・情報化と個人主義化がある。直接的に人を介さなくても情報が入手でき、一言も会話を交わさずに買い物ができる社会をわれわれはつくってきた。また、学校や社会全体で「個性重視」と「価値観の多様化」が広まってきた。この2つは、個人よりも集団に重きをおき、右へならえ的な発想

が強い旧来の日本型社会を変革する起爆剤となってきた。一方で「何をやるのも私の勝手でしょ」となつて、道徳的規範は崩壊を始める。大量の「自己チュー児」を生み出したのである（学級崩壊は、これを具現化した現象であつた）。

本来、個性重視も価値観の多様化も、違う個性や違う価値観を相互に認知してこそ、社会のなかで共存しつつ、「個」を確立できるものであるはずだ。このことを確認するためには、個と集団、公と私の関係を社会全体できちんと構築しておかなければならない。

「市民」という考え方を大切にしたいのは、そのためである。

人間は社会的動物であり、集団で生きることが避けられない。したがって、集団は関わらないですむ無関係な存在ではなく、集団に所属しつつ、集団に埋没しない「個」であり続けられなければならない。その集団をつねによいものに作り変えていかなければならない。そうすることで、集団としての力も発揮され、居心地のよいものとなる。そのためには、集団の成員が、それぞれの役割を適切に遂行し、協働し、相応の責任を負うことが求められる。大切なことは、単なる道徳的規範の遵守や社会への適応だけをいうのではなく、社会の一員として、主体的に他者とかかわりつつ、生活を営んでいくと

いう視点である。

集団とは、たとえば、家族であり、地域であり、学級であり、国である。しかし「市民」は国家によって抑圧されている存在とは考えない。本書でいう「市民」とは、市民革命時代の「市民」ではなく、21世紀型社会の「市民」である。共存しつつ、個と集団が、よりよきパートナーシップを築き、価値を見いだす人々のことであり、まずは敵対するとは考えない。そして、これらの人々の集合体が、個の自立と自律、相互依存性与其他者が共存する社会を生み出すのである。

そのような「市民」を育むためには、行動しつつ検証していくタイプの学びの場が必要である。常に、集団や社会のありようを見つめ、そのなかで生きる自己の姿を鏡にうつし、研鑽を深めていく姿勢が求められる。また、問題に対する観察眼や適切な処置法など問題解決能力を養うことにも力点がおかれるだろう。

「市民教育」とは、そのようなものを育てる営みである。私は、社会的課題を追究し、解決策を模索し、実行し、検証するという意味において、まさにボランティア活動とその学習が「市民教育」であると思っている。ただし、ボランティアといっても、従



来の奉仕型のボランティアではなく、社会的連帯性を基盤とした行為としてとらえた場合のものである。そこで本書では、学校教育を中心に教育分野におけるボランティア学習を中心に述べ、政治学などの市民性の概念や公と私の関係そのものの議論などに深入りすることはしない。教育的な視点から、どのような力をつけるのか、そのためにはどうしたらよいのか、などについて述べていくことにする。

読者の対象は、教育関係者、子どもたちの保護者、学生等、市民教育やボランティア学習に興味・関心をおもちのかたを想定している。また、ボランティア活動、ボランティア学習関係

の講座、講習のテキストとして活用されることも視野に入れた。

なお本書は、これまで私が発表してきたボランティア学習関係の論文などを、市民教育の観点から再構成したものであることを付記しておく。

私の好きな食べ物のひとつに納豆がある。

豆腐も納豆も、どちらも同じ大豆を原料としている。豆腐は、全体がきれいに統一されていて、見た目にも綺麗だ。しかし、原料の豆は見えない。つぶされている。納豆は、原材料の豆がはっきり見えており、しかも相互に糸を引き合っている。集団に埋没した個の状況、集団と個が両立し、個と個に相互関係がある状況を表現したおもしろいたとえば、私は「納豆教育論」と呼んでいる。市民教育は「納豆」をつくる教育である。

二〇〇三年一月九日

長沼 豊